

## 不登校経験を言葉にする意義と役割

### －ある認定フリースクールに通う生徒たちとのグループミーティングを通して－

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
木下 大輔

現在、不登校経験者に対する支援は、「再登校」ならびに「適応指導教室や別室登校」を解決とする単線的な支援の在り方ではなく、持続的・能動的な学習を保障して、社会で生きていく力を養うための複線的な支援の在り方に変化してきていると言える。そのため、そういった支援の中にある不登校経験者の実態を考える必要があると考えられた。

そこで、本研究では、不登校経験者に対する様々な支援の中でも、特に個性的な支援をおこなっているK県K市の認定フリースクール（以下、K認定フリースクールとする）を調査対象とした。K認定フリースクールにおける個性的な支援とは、定期的にグループミーティング活動の場を設けることである。そこでは、生徒たちが代表（以下、塾長とする）やスタッフも交えた場で、自分たちの不登校経験を語り合うことがおこなわれていた。本研究では、生徒たちのグループミーティング活動における認知面や感情面での変化に焦点を当てて、不登校経験を言葉にすることの意義と役割を明らかにすることを目的とした。また、本研究の目的を明らかにするために効果的であると考え、フィールドワークをしながら参与観察をおこなうという方法を取った。調査対象はK認定フリースクールに通う生徒5名であり、分析対象はその生徒たちとのグループミーティング活動の記録と、筆者が活動外の時間に生徒たちやスタッフ、塾長と会話した記録であった。

その結果、生徒たちは自分たちの不登校経験を語り合うことによって、大きく分けて「①対話の中で意味づけをし直す、あるいは意味づけをする変化」、「②既存の意味づけが揺れる、あるいは意味づけを疑い始める変化」、「③その他の変化」という3種類の変化が見られた。これらの変化に対して、本研究では「語り合う」、「当事者のグループである」、「その活動そのものが学びの場になっている」、「思春期や青年期の発達課題」という視点から考察した。このことから、不登校経験を言葉にすることには、治療的・学習的・発達的な援助効果があるという意義と役割が明らかとなった。また、不登校経験者が自分たちの不登校経験を語り合うという活動が意味を持ったものになっているのは、K認定フリースクールという場やそこでの活動が「語り合う」ことを通して「継続的な学習者となる」ことを目的としてデザインされており、塾長やスタッフ、生徒たち同士がそのデザインを体現しているからであると考えられた。

今後は、こうしたK認定フリースクールという場の特徴を明らかにしていくことが必要であると考えられる。なぜなら、その特徴を明らかにすることが、不登校経験者が自身の経験を語り合うという意味のある取り組みを、別のフリースクールひいては学校でも実現することの可能性を示唆することに繋がると考えられるからである。